

自殺

三島佑太

「我が病身 枝垂柳のごとし 惨めに 無常に 齢だけ嵩む」

青年期だからこそ人生を俯瞰する必要がある。

おれが狂いはじめたのはいつからだ？

生来の偏屈さ、頑固さ、脆弱さ、感覚器官の鋭敏さが合わさって一つになり、おれの中にもう一人のおれが創造された。

おれが狂いはじめたのは、身骨の内におれが生まれてから。

内部でおれを操縦し、精神を腐敗させるおれ。

皮膚が垢にまみれるように、おれの魂には蛆がたかる。

憎悪と呪詛が蛆の餌だった。

おれはおれに呑みこまれて、正常な思考ができなくなった。

（おれこそがすべて。どこに間違いがあるのか。指摘できるなら指摘してみる！）

絶対的・無謬であると考えようになつた。

いや、そう思いこまないと、もう一人のおれは溜飲が下がらなかつた。

一方で、おれは傷つくことを楽しんでるようだった。しかし、おれは苦しかった、死んでしまいたいそうだった。

どうにかしたかったが、どうにもできなかつた。

そんなある日、誰かの咳せききを聞いたことでおれは閃いた。いや、決心がついたのだ。

おれはおれを殺そう。

外側にまで波及してくるおれを始末すれば、おれは迷宮の出口を見つけることが可能だ。

——その「自殺」も正常な思考なのかはさておき。

猫よ

三島佑太

人家に隣接した林の中で生まれた
レッドタビーのおまえ

わたしは罪深いことをした

まだ母の愛を充分知らぬうちに

わたしはおまえの母から

おまえを引き離した

産みの親の母の愛を知っていれば

猫よ

おまえは幸せだったのだろうか

もし愛に飢えているのであれば

相も種族もまったくちがう

このわたしがおまえの飢えを癒そう

その玉たまのような眼を見開いて

わたしを見るとき

おまえはなにを思っている

会話できなくても

その「ニャー」の声音で

わたしはいろいろと考えた

七年過ごしておまえの心の機微が

少しかめた気がした

朝夕と

餌欲して鳴く

猫よ

おまえはいま幸せであると信じたい

マントラ

三島佑太

ことばには不思議な力があるという
いにしえの人々はことばを畏れ
マントラといって宗教的に神聖視した
しかし現代人はいにしえの人々とはちがう
ことばを浪費している
ことばで他人を侮り
ことばで他人を呪い
ことばで他人を誑かし
まさに現代人はことばを殺している
死んだことばを使っている
平然と死んだことばが多用されるから
ことばの重みはなくなったような気がする
それでもなかには死んだことばを真に受けてしまう人もいる
これは呪文マントラではないだろうか
悲しいことだ
いま世界では
呪文マントラが蔓延り
真言マントラは死んでしまった
悲しいことだ